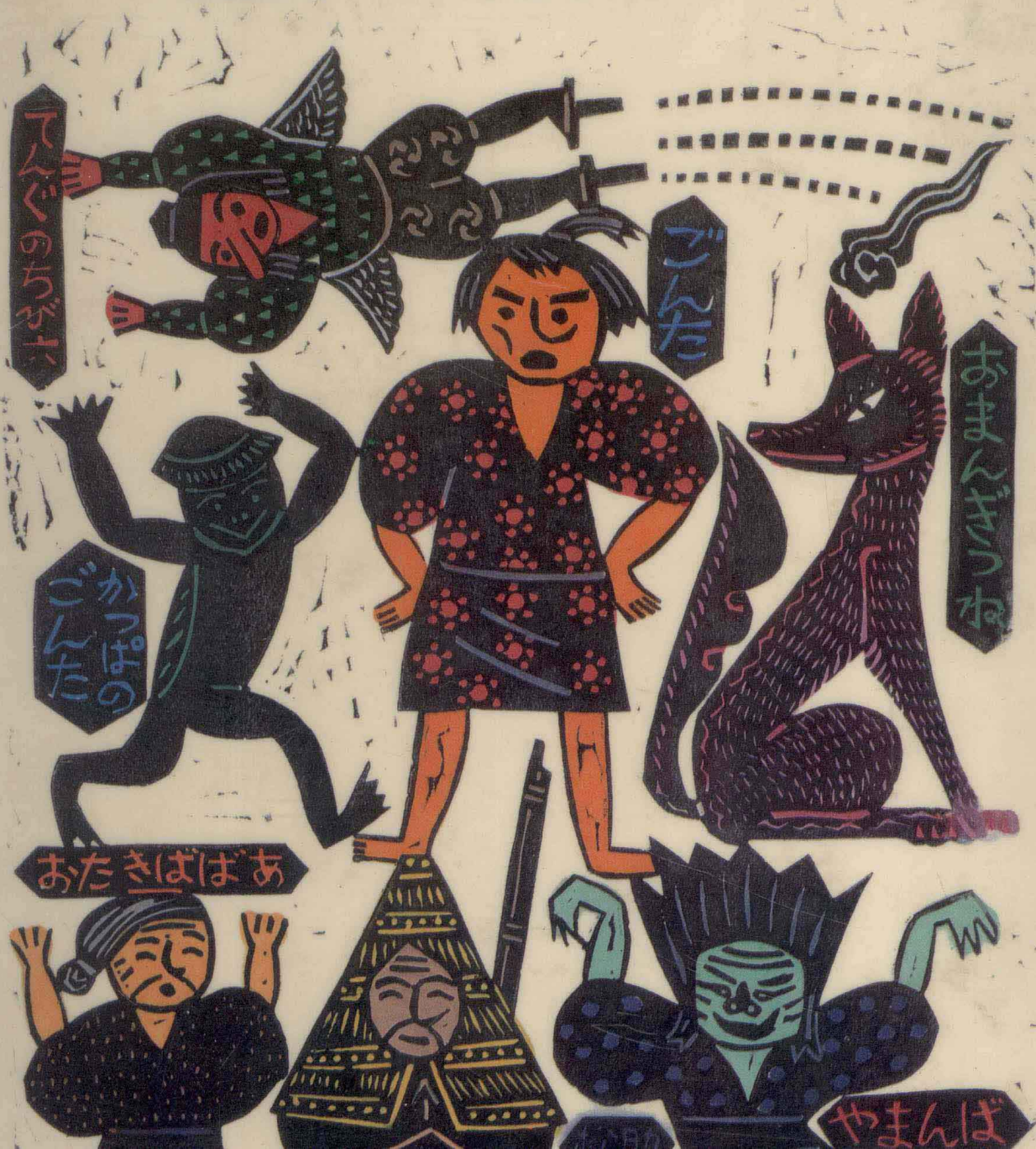


つりがね山は大さわぎ

武田幸一＝作 ● 巽 弘一＝え





つりがね山は大さわぎ

たけ 武 だ 田 こう 幸 いち 一 = 作
たつみ 巽 こう 弘 いち 一 = え

巽弘一（たつみ・こういち）

昭和16年京都生れ、27才まで在京後東京に来る。

ポプラ社『残ったのは二人』のさし絵あり。

この書のさし絵出来たこと幸せに思う。

住所＝東京都葛飾区東四つ木2-4-3～309

武田幸一（たけだ・こういち）

1908年福岡市生まれ。20余年間の新聞記者生活を経て、現在日本児童文学者協会会員。主な作品に『かに平の出発』保育社、『サボテン島の風』『てんぐの橋』『もえる杉の木谷』理論社、など。

住所＝福岡市井尻本町266



理論社のとうわ

つりがね山は大さわぎ

NDC 913
B5判変型
23cm/116p
1977年初版
8393-11811-8924

作者 武田幸一

画家 巽 弘一

制作 小宮山量平

発行 山村光司

株式会社 理論社

東京都新宿区若松町104

電話 (203)5791<代表>

振替 東京 9-95736

1977年12月第1刷©

つりがね山は大さわぎ

武田幸一＝作 ● 巽 弘一＝え

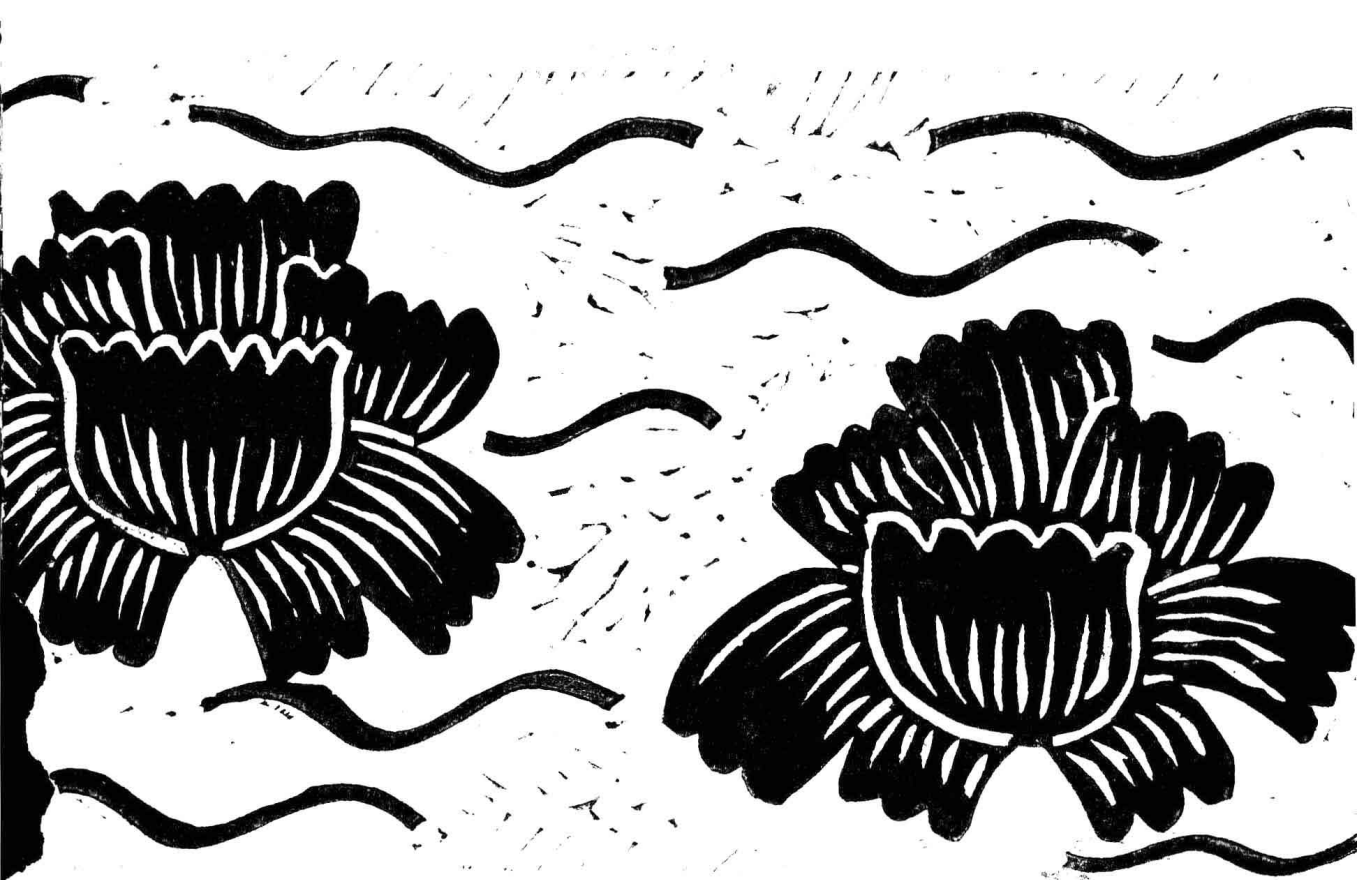


理論社のどうわ

8393-11811-8924

¥880





つりがね山は大さわぎ

たけ だ こう いち
武田幸一 = 作
たつみ こう いち
巽 弘一 = え

原书空白



プロローグ つりがね山が鳴ったな 〓 6

第一話 きつねのしっぽ 〓 10

第二話 ごんげんさまの**大**ずもうおお 〓 28

第三話 名物めいぶつかつぱおどり 〓 52

第四話 てんぐの子チビ六ろく 〓 70

第五話 おおかみ谷だには**大**さわぎおお 〓 92

エピローグ ゴンの旅たびだち 〓 114

プロローグ

つりがね山が鳴^なった

オンギヤア！ と、げんきいっぱいのうぶごえをあげて、
ゴンがこの世^よにうまれ出^でたとき、ゴオーン、ゴオーン……
と、どこからか、かねの音^{おと}がきこえたそう^な。

それはたしかに、つりがねをつき鳴^ならす、でっかあい音^{おと}
だったそう^な。

おやじさんは、そのかねの音^{おと}をきいて、うまれた赤^{あか}んぼ
うに、ゴンタという名^なをつけた。でっかあいかねの音^{おと}を、
そのまんま名^なまえにしたのである。





ところが……つりがね山をとりかこむ三つの村には、そんなつりがねのあるお寺はない。たったひとつ、あるにはあるが、古ぼけた小さな本堂だけの、びんぼう寺である。

とすれば……いったいそのかねの音は、どこからひびいてきたのであろうか？ まさか、赤んぼうがうまれたぞ……と知らせるために、つりがね山が、鳴りひびいたというわけでもあるまい。

つりがね山は、とびぬけて高い山ではないが、うつそうと木がおいしげって、まことにつりがねのかたちをしている。しかし、名まえがつりがね山でも、そんなすごい音をたてて、鳴りひびくわけはありやあしない。

それなのに、かねの音をきいたというて、おやじさんが、ゴンタという名をつけたというのだから、まったくふざけたはなしである。

ゴンは、大きくなるにつれて、そんな、山賊の子分みたいな名まえをつけられて、おれはめいわく千万じゃ……とおやじさんに、もんくをいいたいくらいであった。



おまけに、村のしゅうはゴンタとはよんでくれなかった。かんだんめいりように、ゴンとだけしかよばず、いつか、ゴンが通り名になつてしまった。

つりがねじやあるまいし、ゴン、ゴンと、よびすてにされては、たまつたもんじやない。ところが、つりがねとうげのおまんぎつねだけは、「ゴンタどの」なんて、もったいぶつてよんでくれる。

ゴンは夜あけ方に生まれ、その日の夕方に、おふくろさんは死んでしまった。

だからおやじさんは、

「おのれがうまれるために、おふくろさんを身がわりにするなんて、ゴンは、天下一のおや不孝もんじや」というのであつた。

（ばかばかしい……じぶんは知らないまに、この世にうまれとつたんじや。その日に、おふくろさんが死にまつたからつて、どうして、おや不孝もんよばわりされにやならんのか）



と、ゴンにはむくれないのだが、

（やつぱり、おふくろを身がわりにしてうまれたおれは、
天下一のおや不孝もんかもしれないねえ）

と、おもいなおしてみることもあった。

ところが、そのおやじさんも、ゴンが十五になり、村の
わかものの仲間入りをした春、ポッキリ死んでしまった。

ゴンは、それからずっとひとりぼっちで、おやじさんの
のこしてくれた小屋と、ねこのひたいほどのはたけをたが
やし、庄屋さまのしごとを手つだったりして、どうやら、
じぶんの力でくらしていけるわかものになった。

ゴンはひとりぼっちだが、さびしがったりはしない。

ちよつと、おつちよこちよいだが、根性はしつかりして
いる。ちよつぱりケチだが、よくばりじゃない。とつても
力持ちだが、よわいものいじめはしない。

山のでんぐの子のちび六や、おまんぎつねや、とどろき
川のかっぱたちにだつてすかれる、きもちのシャッキリし
たわかものである。

第一話

きつねのしっぽ



1

小屋こやのすきまからしのびこむ風かぜも、いろんな花はなのおいがする。
春はるの夜よのねむりは、あたい千金せんきんというのに、ゴンゴンは、夜よどおし、
きつねのなき声こえになやまされて、ねむれなかった。小屋こやのまわりをめぐり
ながら、なきたてるきつねの声こえは、ねむられぬゴンゴンのしんけいを、さかな
でするようであった。

そうして、朝あさをむかえたゴンゴンは、土間どまに投げこまれた一通つうのてがみをみ
つけ、

（なんじやろう？）

と、くびをひねりながら、ひらいてみておどろいた。それは、つりがねと
うげのおまんぎつねがくれた、なんだかきみのわるい、てがみだった。

——おなさけぶかいゴンタどのに、
おねがいもうします。わたしの、だ
いじなだいじなしっぱを、どうぞかえ
してください。ゴンタどののすごいち
からで、しっぱをひきちぎられてしも
うたわたしは、しっぱなしのきつねに
なって、なさけないやらくやしいやら、
ほとほとこまりはてております。ど
うぞしっぱをおかえしくだされ。

おれいは、どのようにでもいたしま
す。ゴンタどのがおのぞみであれば、
おまえさまのよめごになっても、よろ
しゅうござります。くれぐれも、おね
がいもうします。

つりがねとうげのおまんより
おなさけぶかいゴンタどのへ。



てがみをよみながら、ゴンは、ぶるぶるっと、身ぶるいした。

「とんでもねえ、きつねのよめごなんて、考えただけでも身の毛がよだつ。そげなことをぬかしくさるなら、なおさらしつぽはかえしてやらんぞ。」

ひとりごとをいって、ゴンがぶりぶりおこっている、手に持っていた、おまんぎつねのてがみは、いつのまにか、一まいのかしわの葉にかわっていた。ゴンはそのかしわの葉に、ベッ！と、つばをはきかけて、くずかごに投げこんだ。

（おれのよめごになってもいいんだって？　ちゃんちゃらおかしいわい。

おまんのかきつねめ。……しつぽがいるなら、おれの目のまえにあらわれてみる。ひきちぎったしつぽが、また、もとのように、くつつくわけでもあるまいに。……このしつぽは、そうじをするときに、ほうきのかわりに使ってやらあ。毛なみのふさふさした、上等のほうきじゃ）

ゴンはフンと、はなのさきでわろして、おし入れにしまっておいた、おまんぎつねのしつぽが無事かどうかをたしかめてみた。しつぽは、ちゃんとあった。ふさふさとした毛なみが、銀いろに光っていた。



2

それは、きのうのことである。

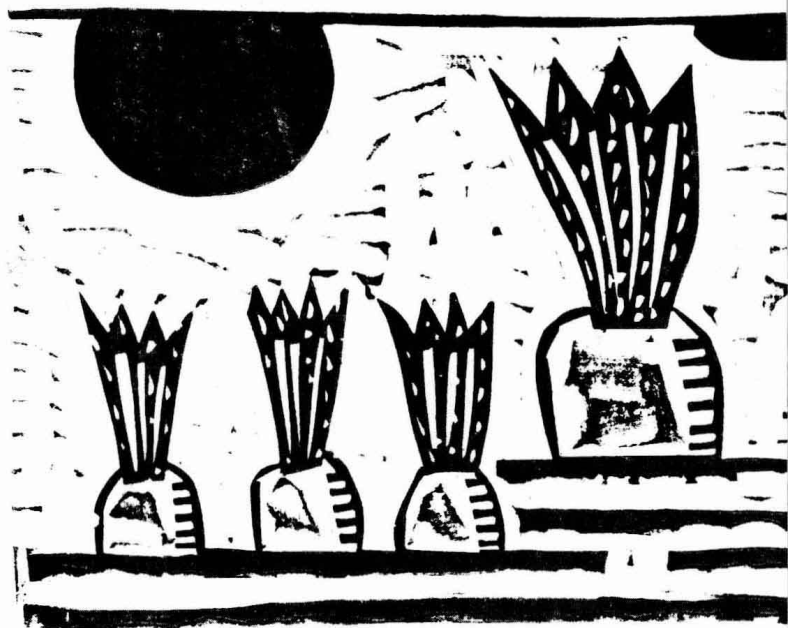
もえぎの月^{つき}が、ケヤキのこずえからもう顔^{かお}をのぞかせて、なんとなく、ころのとろけるような日^ひぐれであった。

ひさしぶり、村^{むら}へおりたおまんぎつねは、百^{ひゃく}しよう家^やのにわとりをぬすんで、まるごと、ぺろりと、たいらげてしもうた。はらっぱいになったので、おたきばあんとこの、ダイコンばたけにはいつて、ひとねむりした。

はらはふといし、春風^{はるかせ}は、そよりそりとあたたかいし、おまんぎつねは、天^{てん}にのぼるようなよいきもちで、ダイコンの葉^はにばけたしっぽを、ゆさゆささせながら、雲^{くも}の上を、さんぽするゆめを見ていた。

そこへとおりかかったのが、ゴンである。

庄屋^{しや}さまの、もみすりの手つだいにいつてのかえり道^{みち}、おたきばあのはたけのダイコンを一本^{ぽん}しっつけいして、ばんのおかずにしようと、こっそり、はたけにしるびこんだ。



「おたきばあ、ダイコンを一本わけてくれ。」

と、たのめば、おたきばあだって、いやとはいわないだろう。

「ううん、氣に入^きったのをぬいて持^もっていけ。」

と、ただでくれるにちがいない。ところが、ちよつぴりケチのくせに、へそまがりのゴンは、おたきばあに、えらそうにはなのさきであしらわれるのが、なんとしても氣^きにくわない。

そこで、はたけをよこぎるように見せかけて、いちばんりっぱで、風^{かせ}にゆさゆさゆれているダイコンの葉^はっぱに、手をかけた。

ちからを入れて、ひっぱったがぬけない。

もうひとときばりちからを入れて、ひっぱってみたが、やっぱりぬけない。
(こりやあ、おかしいぞ)

ゴンは、くびをひねった。

そこで、くそッ！ と、じまんのばかぢからの、ありったけをふりしぼって、エイッ、ヤアのかけ声^{こゑ}といっしょに、ひきぬいた。

とたんに、ギャオーッ！！ と、ひめいをあげて、なにか白^{しろ}いものが、はたけの中をかけぬけて、つりがね山のほうへ、消^きえていった。

ダイコンをひきぬいて、じぶんも、ドギッ！ と、きもをひやしたゴン